



県大 SDGs NEWS Vol. 04 2018 September

地域共生センター 発行

夏期集中講義「近江の暮らしとなりわい」を開講しました

8月24日から26日の3日間、滋賀県立大学/環びわ湖大学・地域コンソーシアム単位互換科目として「SDGsと滋賀のグローバルイノベーション -近江の暮らしとなりわい-」の集中講義が開講されました。県立大学をはじめ、他大学の学生を含む約80名が受講し、様々なSDGsに関する取り組みについて学びました。またSDGsカードゲームやワークショップを通じて、誰も置き去りにしない社会の実現に向けて、自分自身が起こすべき行動について考えました。

初日は県庁を会場に、特別ゲストの国連広報センター広報官の妹尾靖子さんによる講演と滋賀県のSDGsへの取り組みに関する座学が行われました。

まず妹尾さんからは、2015年に国連で採択された持続可能な開発目標(SDGs)の解説とそれぞれの課題の現状について説明がありました。日本からは想像しにくい途上国の状況を詳細に聞き、改善が進んでいる課題もある一方、解決が困難なものもまだまだ多いと感じました。またSDGs達成に向けて国連が取り組んでいる活動についても知ることができました。

その後、県の各部署の担当の方から再生可能エネルギー普及、琵琶湖の環境保全、世界農業遺産認定を目指す漁業・農業の営みなどの講義が続きました。SDGsに取り組むことを全国に先駆けて宣言した滋賀県の具体的なアクションについて理解が深まりました。



2日目は会場を県大に移し、企業や団体の方々をゲストに迎えての講義からスタートしました。それぞれのSDGsの取り組みについて聞き、事業性を保ちながら持続可能性にも配慮し、顧客にも環境等の社会課題を考えるきっかけを提供する経営の理念と実践を知ることができました。

SDGパートナーズ有限会社の田瀬和夫さんと朝日新聞社の北郷美由紀さんからは企業活動とSDGsの関係について総括があり、今後ますます経済界からSDGs達成に向けての動きかけが重要になることを実感しました。

午後はSDGsカードゲームを使ったワークショップが開催されました。様々な事業プロジェクトが経済・環境・社会に影響を与えることをゲームの中で疑似体験し、社会の持続可能性を保ちながら誰ひとり取り残さない世界を実現するにはどうすればよいのかを考える貴重な機会になりました。



最終日は地域に根ざしたなりわいを営まれているゲストに、SDGsと自身の関係を個人の視点から話してもらいました。廃食油からバイオディーゼル燃料を再生することで「ガソリンを売らないガソリンスタンド」を目指す取り組み、琵琶湖の生態系保護のため、網にかかった商品価値のない魚を湖にリリースすることを最優先に考える漁師、森林組合の経営と里山の保護の両立に悩みながら奮闘する女性林業家など、どれも身近に感じられる素晴らしい活動でした。最後に、小さななりわいから環境や文化を守る全国の事例を口ハス・ビジネス・アライアンスの大和田順子さんに紹介してもらいました。

午後は3日間のまとめとして、受講生がグループになり、自分たちが取り組むSDGs達成へのアクションや事業プランを考えました。子どもの貧困を救う子ども食堂の支援やブラック企業撲滅作戦などユニークな取り組みが提案されました。



SDGsをテーマにして、充実した内容の集中講義でした。受講前はSDGsについて殆ど知らなかったが、この授業でいろいろな人たちの取り組みを知り、少し自分ごととして考えられるようになったという学生の感想もありました。今後も自分なりのSDGsの関わりを考え、ぜひ実践につなげて下さい。